

# 特別支援学校における自閉症スペクトラム生徒に対する 余暇レパートリー拡大に関する研究

小野 誉史<sup>\*1</sup>・須藤 邦彦

Expansion of leisure education for students with autism spectrum disorders in special needs schools

ONO Takafumi<sup>\*1</sup>, SUTO Kunihiro

(Received August 3, 2023)

キーワード：特別支援学校、自閉症スペクトラム、余暇

## はじめに

知的障害児や発達障害のある子どもの保護者におけるニーズとしては卒業後の余暇のレパートリー拡大や、家族以外の人間関係が挙げられており、その指導を学校教育段階において開始することの重要性が年々高まってきた（中村・細谷，2021）。しかし、平成30年度の全国特別支援学校知的障害教育校長会の調査によれば、知的障害特別支援学校における自閉症教育の現状として、自閉症のない知的障害児と異なるようなプログラムを導入している知的障害特別支援学校は2割にとどまっている（井上・末吉，2018）。そのため、特別支援学校に在籍する自閉症スペクトラムの子どもたちに対し、その特性に沿った自立課題や余暇活動の支援を充実させる学校内での支援の在り方について検討していくことが重要であると推測された。そこで休憩時間中に1人でタブレット端末を使用し、動画サイトを見て過ごす生徒の余暇のレパートリー拡大のための支援について検討することとした。

## 1. 方法

### 1-1 研究参加者

本研究には、対象者と研究実施者（第1著者）が参加した。

対象者は、A県特別支援学校中学部3年生の男子生徒B児を対象とした。B児は自閉症の診断があり、休み時間のほとんどの時間を、タブレット端末を使用し、動画サイトで動画を見て過ごしていた。学校からは、タブレット端末を使用する時間が長いことがニーズとして挙げられていた。X年6月から7月における予備観察では一日平均183分から222分ほどタブレット端末を使用しており、同年2月から3月にタブレット端末を使用していた時間と比べると98分から137分ほど増加するなど、長時間にわたり使用する傾向が顕著になっていた。

研究実施者は、教員養成系大学の教職大学院に在籍している修士2年の院生であった。研究実施者は、学部を卒業後、そのまま教職大学院に入学し、学校実習の一環として上記特別支援学校を訪れていた。B児とは研究開始年度からかわりがあった。研究実施者は、本研究を含む学校実習全般について、教職大学院に在籍する教員（第2著者）から適宜スーパーヴァイズを受けていた。

研究開始前に、B児の保護者ならびに特別支援学校の管理職に対し、研究の目的、方法、結果の分析方法と個人情報を取り除いたうえでの公表、そして研究の辞退や中断が可能であり、また仮に辞退、中断しても本人及び保護者にその後不利益が生じることはないこと等を紙面と口頭で説明した。そして保護者と管理職から研究の承諾を得た。

---

\*1 山口県立田布施総合支援学校（令和3年度入学 山口大学大学院教育学研究科教職実践高度化専攻特別支援教育コース）

## 1-2 期間・場面

観察及び介入期間は、X+1年10月～X+2年3月まで行った。場面については、1日のタブレット端末を使用する時間のうち特に長時間使用していた個別の課題学習後の休憩時間及び、給食後の昼休みの時間とした。

## 1-3 推奨する余暇活動の導出と概要

本研究では、まず、推奨する余暇活動を抽出するために、普段の授業時間や休み時間における過ごし方の観察と、担任などの関係教員と保護者からの聴取を行い、B児の好みにあうと推測され、かつ学校場面で可能な活動を3種類（クイズ、ダンス、カラオケ）導出した。また介入が進むにつれてこれらの活動への飽和（一部回避）が認められたため、その後2種類の活動（マッサージ、CD鑑賞や読書）を追加した。

クイズは、B児が好きであると思われる動物に関する簡単なクイズをPowerPointのスライドショーで提示し、研究実施者が問題を読み上げてB児が口頭で解答するクイズ、スライドショーでシルエットを提示してB児が解答するクイズ、動物のイラストや写真を提示して鳴き声を解答するクイズからなる3種類を提示した。ダンスは、B児が普段動画サイトで流している音楽やこれまで好きであったとされる音楽をかけつつ、TVに研究実施者が躍っているダンス動画を映して、B児に模倣を促す活動とした。カラオケは、B児が好んでいると思われる音楽を、TVに歌詞を映しながら提示し、それを見ながら研究実施者と一緒に歌う活動とした。マッサージは研究実施者がB児の全身を10秒ずつ数えながら手のひらと指で一定の圧力をかける活動とした。マッサージを行った部位は、主に、頭部、上半身（肩や腕など）、下半身（太腿や脛脛など）であり、本人が痛がったり拒否したりする反応を見せない限りは、同じ圧力で実施した。またマッサージを実施する部位について、実施直前にミニホワイトボードに記された文字と音声言語で伝えるとともに、マッサージ中も部位の名前を伝えた。これら4つの活動は、図1の設定で実施した。これらの活動では、B児を部屋の中央の椅子に着座させ（マッサージは中央に置いたマットの上に横にならせ）、研究実施者が適宜PCやTV等を用いて活動を実施した。

CD鑑賞や読書は、上述した余暇活動を実施した場所（主に教室）とは異なる場所（多目的室）で実施した。多目的室には、書籍やCDなどがあり、B児は選好する書籍やCDを選択した。多目的室は図2のようになっており、読書はソファに着座して、CD鑑賞はパソコンを使用して実施した。

## 1-4 標的行動

標的行動は、上述した余暇活動について、研究実施者が提示した選択ボード（図3と図4）の中から該当するカードを選択し、その活動に従事する行動とした。介入期の選択ボード（図3）は、縦横が20×30cmのホワイトボードを用い、左上部に「いまからすること」と記した赤い枠を、下部に3種類の活動カードを添付して提示した。活動カードは「タブレット端末」、「後述する余暇活動の中のいずれかの活動名」、「その他」が記された3つを呈示した。それぞれの活動カードにマグネットを付け、B児が容易に活動カードをホワイトボードから取り外せるようにした。3つの活動カードからB児が1枚カードを選択した際には、「いまからすること」へ貼り付けるように研究実施者が誘導した。

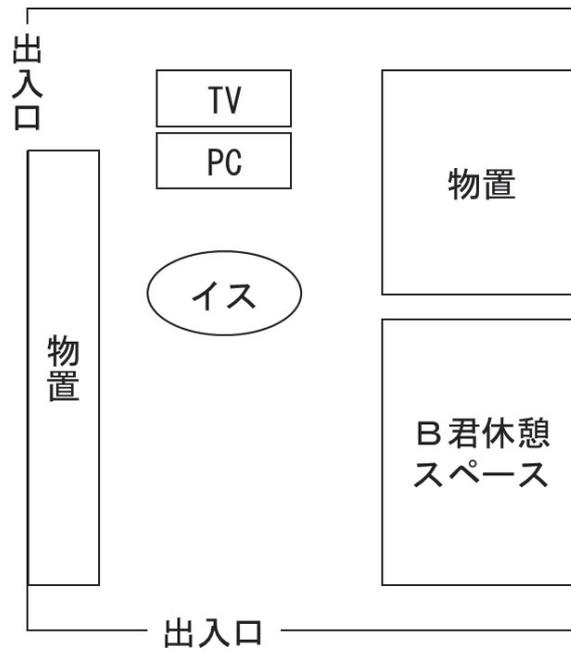


図1 クイズ、ダンス、カラオケ、マッサージに従事する場面の設定

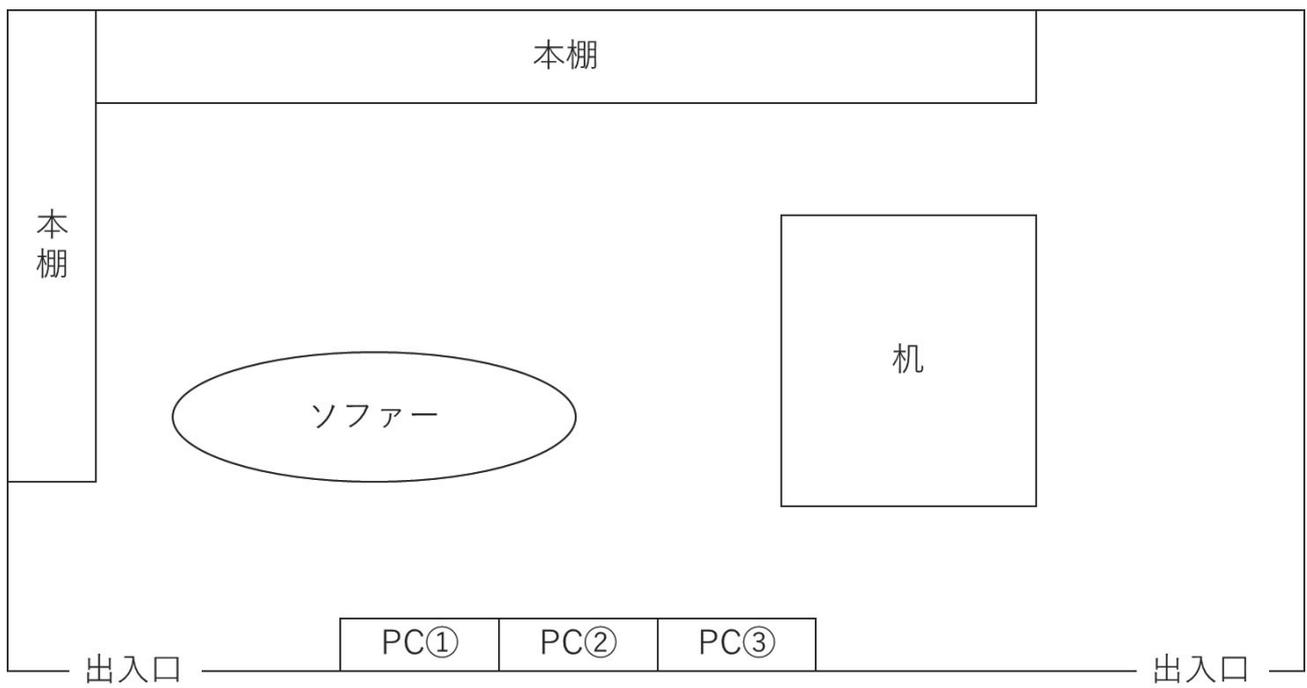


図2 CD鑑賞や読書を行った多目的室の設定

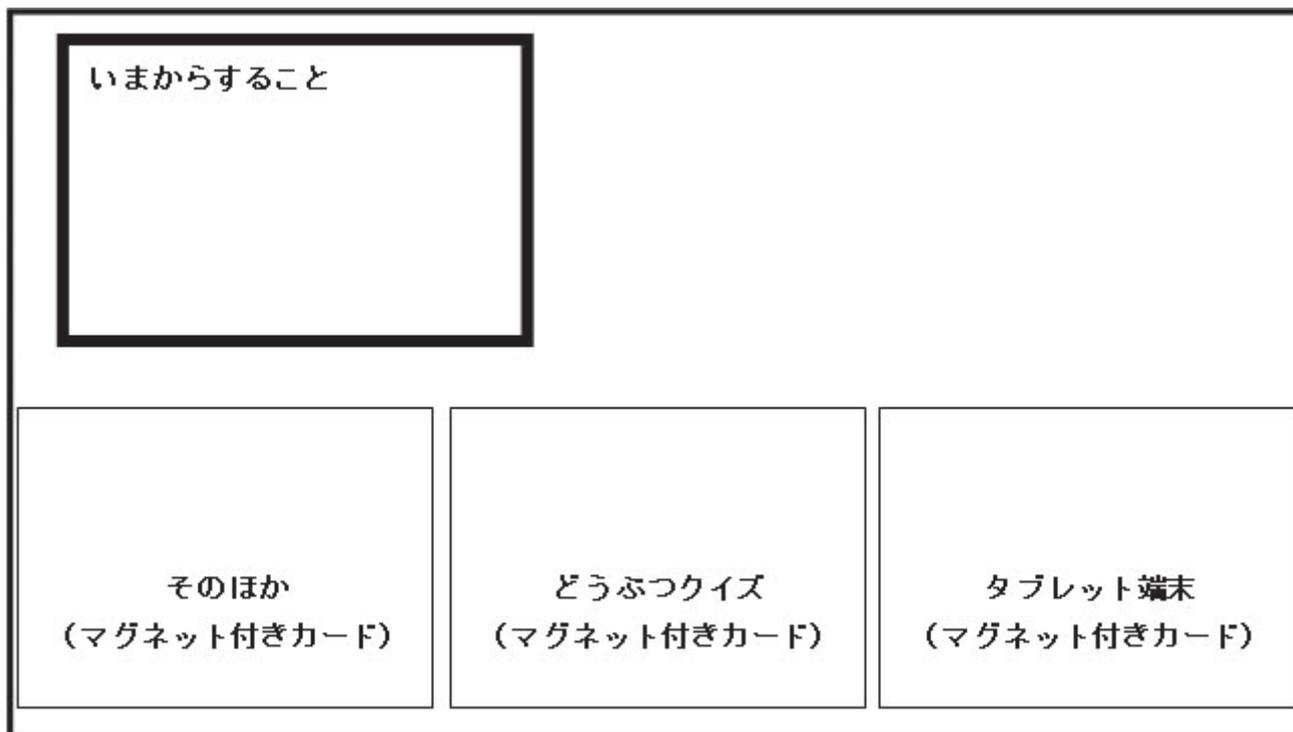


図3 介入期の選択ボード

プローブ期では、介入期で行い、B児が肯定的な反応で従事したクイズ、マッサージ、多目的室での活動、その他という選択肢を示した選択ボード(図4)を示した。それぞれの活動カードにマグネットを付け、B児が容易に活動カードをホワイトボードから取り外せるようにした。4つの活動カードからB児が1枚カードを選択するよう、研究実施者が促した。

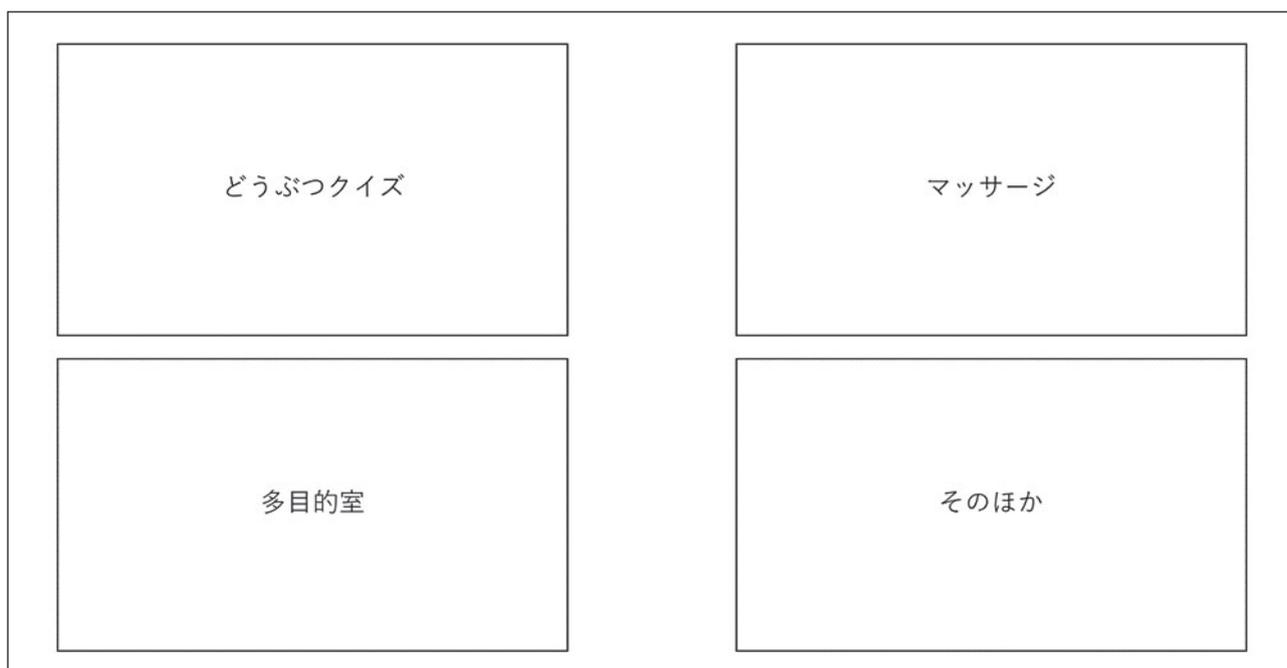


図4 プローブ期の選択ボード

#### 1-6 手続き

本研究では、ベースライン(以下、BL)期、介入1と2、プローブ期を設定した。

BL期では、普段の個別の課題学習後の休憩時間及び、給食後の昼休みの時間を観察した。休憩時間や昼休みの時間が終わる直前に次の授業の準備や移動を促すこと以外は、特に支援を行わなかった。

介入1では、個別の課題学習後の休憩時間及び、給食後の昼休みの時間の冒頭に、上述した推奨する余暇活動の一部（クイズ、ダンス、カラオケ）に従事する機会を設定した。個別の課題学習直後の休憩時間では、課題実施前に余暇活動を予告しておき、個別課題終了直後に実施した。昼休みの時間では、B児は研究実施者に口頭でタブレット端末を要求する傾向があったため、タブレット端末を準備する待ち時間（約5分ほど）の間、推奨する余暇活動に参加するよう促した。これらの余暇活動は、活動中のB児の様子を見ながら徐々に1回あたりの実施時間を長くするように試みた（B児が当該余暇活動に飽和した反応を示した場合や異なる活動への従事を望んだ場合には即座に終了した）。いずれの休み時間においても、これらの推奨する余暇活動を1回行った直後に、選択ボード（図3）を提示して、標的行動が生起するかを確認した。

介入2では、介入1において行ったダンスやカラオケの活動を拒否する様子やクイズに飽和した反応を示す様子が見られたため、B児が学校生活において自発的に取り組んでいたマッサージと多目的室に行きCD鑑賞や読書をする活動を推奨する余暇活動として取り入れた。いずれも介入1と同様の設定で個別の課題直後や給食後に実施し、その後、選択カード（図3）を提示して標的行動が生起するかを確認した。

プローブ期では、介入期のような推奨する余暇活動に研究実施者がいざなう機会をなくし、休み時間になった直後に、選択ボード（図4）を提示して、標的行動が生起するかを確認した。

## 1-6 測度

介入1については、休み時間におけるタブレット端末を行う時間と推奨する余暇活動（主にクイズ）に従事する時間とした。また、介入2については、休み時間におけるタブレット端末を行う時間と推奨する余暇活動（主にマッサージ）、そして多目的室で推奨する余暇活動（音楽鑑賞や読書）に従事する時間とした。プローブ期については、休み時間における図4から選択した活動の従事時間とした。

## 2. 結果

本研究の休憩時間におけるタブレット端末の利用率と推奨する余暇活動の従事率を図5に示した。

BL期においてB児は、100%の割合でタブレット端末を利用し、動画を視聴して休憩時間を過ごしていた。

介入1では、休憩時間開始直後に推奨したクイズに3分から5分半程度従事したため休憩時間における従事時間の割合は、14%から47%であった。しかし、一度推奨した余暇活動に従事した後は、必ずタブレット端末を選択し動画を視聴した。なお、クイズは、自発的にパソコンを操作したり、解答時に笑顔を見せたりする様子などが認められたが、実施回数がすすむにつれて活動に飽和した反応が見られ始めた。また、ダンスは介入開始直後から活動を拒否する様子が見られた。カラオケについても初めは笑顔が見られたり、体を横に揺さぶったりするなど楽しんでいる様子が確認できたが、回数を重ねるにつれて活動を拒否する様子が確認できた。

介入2では、2月15日は多目的室で読書、2月17日、20日はマッサージを実施した。多目的室で読書に従事した時間は、全休憩時間のうち75%（15分）となった。また、2月17日と20日のマッサージは、それぞれ休憩時間のうちの41%（12分）、38%（9分）であった。マッサージ実施時には、笑顔になる様子が見られたり、次にマッサージする部位を研究実施者に伝える様子が見られたりした。また、多目的室での読書時には、研究実施者に読み上げてほしい箇所を指差したり、復唱したりする様子が見られた。いずれも、推奨する余暇活動に従事した後は、タブレット端末を選択し、動画を視聴した。

プローブ期においてB児は、いずれも選択ボードからそのほかを選択し、タブレット端末を要求したため、タブレット端末の割合が100%となった。一方、登校直後にタブレット端末で動画を一定時間視聴した後に、多目的室を利用したい旨を研究実施者に要求する様子が確認できた（学校の授業などの事情により、多目的室は使用させなかった）。

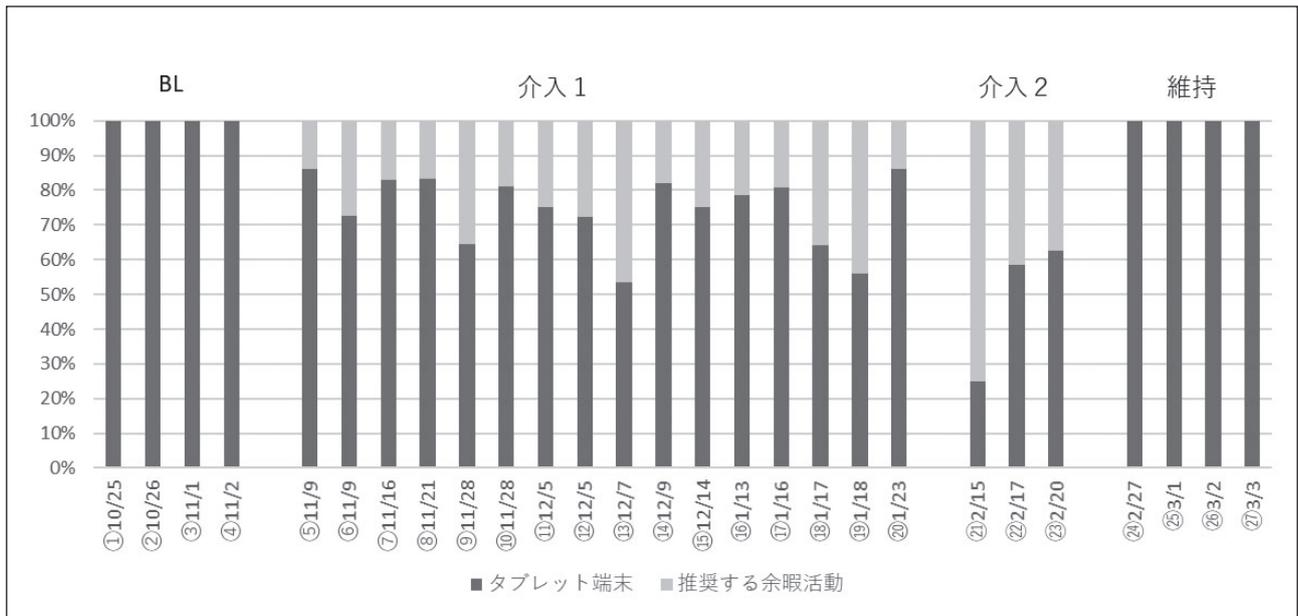


図5 休憩時間におけるタブレット端末の利用率と推奨する余暇活動の従事率

### 3. 考察と課題

本研究では、休憩時間中に1人でタブレット端末を使用し、動画サイトを見て過ごす生徒に対し、本人の興味があると推測された余暇活動に従事する時間とそれらの選択機会を提示して、余暇活動のレパートリー拡大を試みた。その結果、介入期では一部の余暇活動に従事することが可能になったものの、プローブ期では介入の効果は確認できなかった。以下では、介入期に効果が確認できた理由と、それがプローブ期において確認できなかった理由を考察する。

#### 3-1 B児が見通しをもつことができたことの効果について

ベースライン期においては、タブレット端末の利用時間の割合が100%であった一方で、介入1及び2においては研究実施者の誘いに応じて、即座にクイズや読書、マッサージに一定時間従事できた。クイズでは好みの動物の画像をPowerPointのスライドショーを用いて提示し、B児自身もこれらを活動実施前に操作する様子が認められた。また、マッサージについても、これまでに実施したことがある活動であり、B児もマッサージをする部位や体勢についてホワイトボードを介して要求していた。一方、ダンスは自作の動画を使用したものの、初めてB児に見せる動画であり、彼が動画全てを事前に視聴する機会を設定しなかった（そのため、最初の導入手続き時に不安が喚起し、即座に活動参加を拒否する行動が生じた）。B児は視覚的な情報で見通しを得ると安心して活動に従事する傾向があり、このことが活動への参加の有無に影響したのではないかと考察した。

服巻（2003）は自閉症スペクトラムのある方への支援としてTEACCHプログラムにおける構造化の一つである、視覚的構造化の有効性を示唆している。本研究においても、好みの画像を視覚化して提示したり、活動の実施順序等を視覚化したりした（本人に活動の見通しをもたせた）ことがB児の活動従事につながっていると考えられ、先行研究の知見を支持したと推察した。

#### 3-2 活動の選択と活動中のやり取りによる随伴性について

上述した見通しとは別に、推奨した余暇活動はいずれも本人の興味があると推測されるものを導入した。具体的には、クイズであれば動物を採用したクイズを3種類用意し、多目的室における読書やCD鑑賞では、本人の興味がある動物に関する図鑑や本、鳴き声が収録されているCDを複数提示することが余暇活動に一定期間従事することに影響したのではないかと推測した。また、クイズにおいては本人が好んで自発していたハイタッチを取り入れ、多目的室での読書やCD鑑賞においては図鑑や本をB児が指さした際に、研究実施者が文章を読み上げたり、鳴き声のマネをしたりする対応を実施した。このような活動中に強化的なやり取りを挟む

ことも重要である可能性が推測された。

和田（2018）は、余暇活動の要点として、本人の好みを大切にすることの重要性を挙げている。本研究においても、日常生活においてB児が興味関心をもっている事物や、好む（他者との）やり取りを手続きに適宜導入したことが、B児の余暇活動への従事につながったのではないかと推察された。

一方で、B児は普段音楽を聴いたり、お楽しみ会などでカラオケを行ったりしたことがあったためカラオケを活動の一つに取り入れたが、途中から従事できなくなった。その理由として、B児の好みが曲全体ではなく、一部のフレーズや音が好きであったことが推測される。実態として、何度も同じ箇所を聞き返す様子が観察できていた。そのため、B児の音楽を用いた余暇活動を広げるためには、興味関心がある部分を連続的に提示するなど、音楽を聴く活動の強化スケジュールを工夫していく必要があると考える。

### 3-3 本研究の課題

B児はプローブ期のすべてにおいて、選択ボードの中から「そのほか」を選択し、タブレット端末を要求した。これらの結果から、タブレット端末がB児にとって非常に強力な強化子になっていることが推測できた。一方で、介入1や介入2において推奨した余暇活動に笑顔で取り組む様子も見られた。そのため、タブレット端末に次ぐ強化子となりうるものが予想できたものの、タブレット端末が選択できない状況での実践を行っていない。今後は、タブレットが選択できない場合での余暇活動の拡充を検討する必要があると考える。

また、山田・前原（2023）は、知的障害者に関する余暇支援の国内実践研究をレビューし、余暇活動への従事とともに獲得された技能がその後の余暇の充実にどのように結びついたかを検討する必要性を示唆している。本研究においても、クイズやマッサージ、あるいは多目的室での音楽鑑賞などへの従事において獲得・発揮されたB児の技能をどのように今後の余暇活動の充実に活用するかということが課題として残された。

## 引用文献

- 服巻繁（2003）：TEACCHと援助アプローチ，小林重雄・園山繁樹・野口幸弘編著「自閉性障害の理解と援助」，コレール社，102-107.
- 井上隆・末吉幸人（2018）：全国特別支援学校知的障害教育校長会平成30年度情報交換資料全国まとめ。  
[http://www.zentoku.jp/dantai/titeki/yamagata\\_h30\\_2.pdf](http://www.zentoku.jp/dantai/titeki/yamagata_h30_2.pdf)（2023年7月28日）
- 中村龍平・細谷一博（2021）：障害者を対象とした余暇学習（活動）に関する文献レビュー，北海道教育大学紀要 教育科学編，第71巻，55-67.
- 和田充紀（2018）：自宅や職場で気軽にできる余暇活動に関する研究：知的障害特別支援学校における「ナンプレ」を活用した実践から，富山大学人間発達科学部紀要，13巻1号，51-58.
- 山田有輝也・前原和明（2023）：知的障害者の余暇に関する文献レビュー：実践研究に焦点を当てて，秋田大学教育文化部研究紀要，78, 97-103.